

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月13日現在

機関番号：32664

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520199

研究課題名（和文） 日本文学上に現れた興福寺常楽会の研究

研究課題名（英文） The Jōraku-e ceremony of the Nara temple Kōfuku-ji in Japanese classical literature

研究代表者

磯 水絵 (ISO MIZUE)

二松学舎大学・文学部・教授

研究者番号：60130407

研究成果の概要（和文）：『古今著聞集』巻第六管絃歌舞第七序に「興福寺の常楽会」と見えて、石清水の放生会と並称されている。そこで、その実態を探ろうと、『大日本仏教全書』中の興福寺関係文書、『興福寺典籍文書目録』等を博搜すると同時に、常楽会同様旧暦2月15日に举行される涅槃会の他、四天王寺の聖霊会、高野山金剛峯寺の常楽会、国立劇場の伎楽公演等、古式を窺えそうな音楽法要に足を運んだが、四箇法要以前の様態は遂に認められなかった。

研究成果の概要（英文）：The Jōraku-e ceremony of the Nara temple Kōfuku-ji is cited along with the Hōshō-e of Iwashimizu Shrine as a representative Buddhist ceremony of ancient to medieval Japan in the prologue to the chapter on music and dance in the 13th-century collection of historical tales *Kokon chomon-jū*. In order to clarify its original form, a survey was made of documents associated with Kōfuku-ji in the *Dai Nihon Bukkyō Zensho* (The Collected Works of Japanese Buddhism) and *Kōfuku-ji Tenseki Monjo Mokuroku* (Catalogue of Books and Documents of Kōfuku-ji). Also surveyed were ceremonies of ancient provenance with major musical elements, such as the Nehan-e (held on the same date as the Jōraku-e, namely the fifteenth day of the second month of the old calendar), the Shōryō-e of the Ōsaka temple Shitennō-ji, the Jōraku-e of the Mt. Kōya temple Kongōbu-ji, and stage performances at the National Theatre (Tokyo) of the ancient masked dance pantomime *gigaku*. It proved difficult, however, to clarify the form taken by the ceremony earlier than the twelfth century or so.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・美学・歴史学

キーワード：興福寺・常楽会・四天王寺聖霊会・熱田神宮・法華会・舞楽法要・『古今著聞集』・『宇治拾遺物語』

1. 研究開始当初の背景

(1) 興福寺常楽会については、『古今著聞集』

巻第六管絃歌舞第七序に記されているものの、当時の様相は不明であった。

(2) 日本古典文学大系本『古今著聞集』の頭注には、「興福寺でいとなむ涅槃会。涅槃会は陰暦二月十五日に仏の入滅を追悼する法会。」としかなく、儀式音楽の実態は解説されていない。

(3) 石清水八幡宮放生会に並び称される興福寺常楽会であるが、まったく忘れ去られていたとあってよい。

(4) 仏教儀式については、寺院側から、音楽・文学側から、歴史側からと、諸方から進められてはいるが、それらの成果は総合的に論じられてはこなかった。

(5) そもそも日本音楽史の研究自体が歴史学として確立しておらず、未開拓であった。

2. 研究の目的

(1) 明治期の廃仏毀釈運動にいち早く呼応したがために、興福寺はその財産や記録・文献を多く散逸した。そのために、興福寺常楽会の記録も失われ、現在はわからなくなっている。そこで、本研究の第一の目的は、その古態を探ることにある。

(2) 石清水八幡宮放生会に並び称される常楽会の実態を知り、『古今著聞集』巻第六管絃歌舞第七序を正しく理解することが第二の目的である。

(3) 第三の目的は、院政期以前の仏教文化、特に音楽の実態を理解することにある。

(4) 最終的には、中古中世の文化史の一端を解明し、それを充実させることが目的である。

3. 研究の方法

(1) 関西に実地踏査に赴き、法隆寺・興福寺近辺の図書館・資料室等を廻り、常楽会関係の資料調査を試みる。

(2) 高野山金剛峰寺の常楽会、大阪四天王寺の聖霊会等、関わりのありそうな寺院の大会を見学し、その片鱗を窺う。

(3) 『興福寺典籍文書目録』、四天王寺関係資料等、文献を博捜し興福寺常楽会関係の記事を見出す。

(4) 日記類、史書類に常楽会関係記事を見出し、その様態を探る。

4. 研究成果

(1) 一年目

① 奈良県立図書情報館他、奈良県内の各図書館・資料室を巡り、常楽会に関する資

料を捜索した。が、結果的には、ほとんど興福寺常楽会についての資料は見出せなかった。

② 奈良文化財研究所に出向き調査したが、やはり収穫はなかった。

③ 『大日本仏教全書』所収の『興福寺流記』等、興福寺関係文書を調査したが、その記載は比較的に新しく、しかも伝承性が高く、史実とは認めがたいものも多いことが判明した。

④ 石舞台を有し、古くから楽所を構成していた大阪の住吉大社、四天王寺を見学に行ったが、現行においてはその舞台で舞楽が行われており、当初の形態とは大きく変容している様子が窺えた。そこはあくまでも練習場であったはずである。

⑤ 2月に高野山金剛峯寺の常楽会を見学に行く。が、その結果としては、同寺のそれは四座講式の形を示しており、中世を遡らないことが判明した。

(2) 二年目

① 興福寺常楽会、二日目の法華会については、熱田神宮との関係が深いようである。そこで、『熱田神宮史料』を購入し、調査に当たったが、それから有益な情報は得られなかった。

② 大阪四天王寺の聖霊会の見学に行ったが、現行の法要は時間的に短く、四箇法要である以外に特別なものは見出せなかった。

③ 9月には大阪国立文楽劇場において、天台宗真正極楽寺真如堂の引聲阿弥陀經会、真言宗醍醐寺の仁王会を見学したが、いずれも、中世を遡る形式は見出し得なかった。

④ 京都の盆行事である六道まいりを六道珍皇寺に、万灯会を六波羅蜜寺等に見学したが、古式を探るにはむずかしいものであった。

⑤ その後、古い仏教の痕跡を求めて、九州福岡に赴き、臼杵石仏・宇佐八幡宮周辺の調査を行った。そこには中央とは異なる信仰形態を認め、その図像・絵画資料には、古色を認めた。その更なる調査は今後の課題である。

(3) 三年目

① 最終年度は、これまでの調査の結果、

常楽会は、その他の大寺の法要がそうであるように、四箇法要の形式を取っていると考えられることから、その痕跡を東大寺大仏開眼供養会に求めることとし、まず、天平勝宝4年(752)のそれ、次に鎌倉時代、建久6年(1195)の東大寺供養の研究を開始した。

② その研究は案外に進んでおらず、報告者は両供養会の儀式次第の整理にかかったが、まだ途中である。

③ その外縁研究として、鴨長明の琵琶の師匠中原有安も出席したと推察される建久の供養会に注目し、併せて鴨長明の伝記研究に傾いたが、それは決して本研究課題を外れるものではなく、当時の楽所の状況や、その周辺の人々の様態を知るに必要なものであった。

④ 国立劇場の伎楽公演に赴き、舞楽に先行する伎楽、或いは行道の折に連なる伎楽の獅子を想像したり、民俗芸能公演にその片鱗を窺おうと試みた。

⑤ 東大寺ミュージアムに開催された古文書学会には興福寺関係文書の発表が数組あったので足を伸ばしたが、然したる成果は見出し得なかった。

⑥ 法隆寺お会式に出向いた。これは、さほどの期待はせずに赴いたが、その声明は興味深く、規模はずいぶんと縮小されている模様であるが、示唆に富んだものであった。できれば、何年かに一度举行されるといふ大会に再び行きたいと考えている。

(4) 総括

結論として、各寺院の大会を通覧してきた結果として、興福寺常楽会は元来四箇法要の形式で行われていたらしいという推測はできるように考えられる。

文献的には、興福寺常楽会自体について、『大日本仏教全書』にある以上のことは、結局、見出し得なかったが、視点を変えて、東大寺大仏開眼供養会に注目すると、その法要の式次第は、充分、窺いうると考える。

問題は、東大寺のそれと、興福寺の常楽会の式次第が、どれだけ近似しているか、または乖離しているかであるが、それは今後の課題である。もとより大仏供養会は一回性のものであり、興福寺常楽会は毎年遂行されるべきものである。当然そこには経済的に考えても、大きく違って来ようと考えられる。今後は、その辺りを鑑みながら、常楽会の様態を考察していきたい。

また、九州地方に散見された図像資料に、

さらに焦点を当てていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 磯水絵、興福寺常楽会序説—消えた興福寺常楽会—、唱導文学研究第八集、依頼、2011、52~70
- ② 磯水絵、後鳥羽院の時代—鴨長明と大神景賢、文学第13巻第2号、依頼、2012、111~123
- ③ 磯水絵、『方丈記』の世界—長明、南へ—、國語と國文学第89巻第5号、依頼、2012、16~29
- ④ 磯水絵、長明と管絃、鴨長明とその時代方丈記800年記念、2012、96~104
- ⑤ 磯水絵、『発心集』に浄土信仰の有り様を見る、鴨長明 研究と資料第1輯、2012、3~15

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

- ① 磯水絵、勉誠出版株式会社、大江匡房—碩学の文人官僚、2010、282

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

(磯 水絵)

研究者番号：60130407

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：